

中国のほんの話(34)

性社会学者・潘綏銘

(Pan SuiMing)

蔭山 達弥



潘綏銘は中国人民大学教授、性社会学研究所所長、博士課程の指導教員でもある。潘教授は性社会学の授業を担当しているので、人から

「麻辣(舌がひりひりしびれるように辛い)教授」とふざけて呼ばれる。国内を歩き回り、中国人の性関係と性行為を調査している。性学の専門家、潘綏銘は常に人々の好奇の目、根も葉もないうわさの風波にさらされている。

潘教授は相手側にもぐり込んで「三陪女(風俗産業で客の相手をする女性)」を調査し、地下性産業を明るみに出した。『存在と乱れ 中国地下性産業調査』(群言出版社、1999)、続く『生存と体験 地下红灯区(風俗営業の店)に対する追跡調査』(中国社会科学出版社、2000)は珠江デルタB鎮(鎮: 県の下行政単位)の性産業を実地調査したものである。潘教授は1996年頃から調査を始め、一人で行っていたが、1999年以降、6人の女子大学院生、1人の女性教員と一緒にいった。調査したのはすべて風俗営業が集中している「红灯区」であり、すべて社会の最下層の女性、ヘアサロン、カラオケ店の「三陪女」である。カラオケ店の女の子のほとんどが農村出身者だ。多くの人は潘教授が買春する遊び客のふりをして、売春婦を調査していると誤解しているが、実際はそうではない。潘教授は彼女たちから本当の話を聞きだすため、彼女たちと友人になったのだ。彼女たちはわりと集中して同じ場所に住んでいて、しばしば自分の営業している場所が裏側にある。潘教授はそこに行って、個人所有の家屋を賃借りし、毎日、彼女たちとうまく付き合ったのである。記者でないことを証明するため、紙やペン、カメラや録音機を持たなかったし、彼女たちに殆ど質問せず、ただ聞いたのだった。潘教授が本を書くことに、彼女たちは非常に関心を示し、一冊書いたら、どれくらい儲かるのか、つまり分け前を少しくれないかということをや外に言うのだった。上記の二冊は風俗営業地区の発展経路、形成要因、運営メカニズム、および社会環境との関係などの問題について研究したものであり、性産業に加わる或いは関わった様々な個人や彼らの人生経歴をより多く知るための書物である。潘教授はいわゆるボルノ一掃の目標を、道徳を立て直すことから、性病の予防に移さなければならないと言う。感染のルートは主として風俗店で働く彼女たちからである。中国の20歳から64歳までの性病感染率は2.3%である。これは10万人に換算すると、2,300人になり、感染症の学者から見て、驚かせる数字なのだそうである。

さて、2004年2月に中国性学調査研究シリーズレポートの一冊として、潘綏銘らによる『当代中国人の性行為と性関係』(社会科学文献出版社)が出版された。この本は20歳から64歳までの3,824人をランダムサンプリングし、調査したものである。それによると、現在中国では、非婚性行為、婚外性行為が増加し、平均すると13%から16%、都市部では30%近くになり、30歳から35歳ではほぼ半数である。中国の性革命は既に出現しているのである。しかし、その一方で中国人の性生活が非常に単調であることもわかった。なんと四分の一の人がキスをしないのである。潘教授は性の重要性、そして婚姻の必要性について言う。「婚姻・性・愛情、この三者がすべて円満であるのが、理想の状態である。」「婚姻は弱体化している。けれども夫婦の愛の機能は弱体化しないばかりか、強くなる可能性がある。なぜか? 外部の競争がますます激しくなり、ますます見知らぬ人同士の社会になるなら、夫婦の愛が風を避ける港になるからだ。」潘教授は中国も先進国のように結婚して離婚する、再婚してまた離婚するといった連続した多配偶制になるだろうと予測している。

かげやま たつや(教授・中国文学)